2023 年 4 月 22 日

第 34 回加藤周一文庫公開講読会『続羊の歌』を読む

「信条」

加藤周一現代思想研究センター研究員
半田侑子

梗概

本章は敗戦からひと月、信州上田より東京へ戻ってきた頃を描く。『羊の歌』正編の第 1 章は「祖父の家」であったが、「信条」は「祖父の家」の没落、敗戦後の日本の焼跡からはじまる。

焼跡の東京には見せかけの代わりに真実があり、とりつくろった体裁の代わりに生地のままの人間の欲望がすさまじく渦を巻いていた。政府は「一億総ざんげ」という言葉を「思いついて」宣伝するが、人々は配給では生きていけず、闇市などで食料を確保し、生きていくのに精一杯であった。「戦後の虚脱状態」という言葉もよく使われたが、しかし、加藤は東京の市民の顔に「不屈の生活力」が溢れているのを見るのだった。

だが「占領」を「駐留」、「降伏」を「終戦」と呼ぶ占領下の日本で、占領軍の若い兵士の言うことには理由の如何を問わず唯々諾々と従う電車の男の描写は、その後の日米関係や、「押しつけ民主主義」を暗示する。

加藤は占領がはじまったときに、予想したことが起こりつつあると考えていたという。加藤は戦争を民主主義対ファッシズムの戦いと考えていた。「進み」を基礎とする民主主義と、「後れ」を基礎とするファッシズムの世界的な規模での対決には「歴史」がその決着を予言するだろうというのが当時の加藤の考えであった。「歴史の歯車は逆には廻らない」、それが加藤の信条であった。加藤は戦争と占領軍を正確に理解していたと自ら信じ、理解の理論的枠組みへの確信を強めるようになった。その「信条」の漠然とした体系を、「イデオロギー」とするなら敗戦直後は加藤が最も強く「イデオロギー」の力を信じていた。敗戦直後の加藤はすべての「後れ」を日本社会によって代表させ、「進み」を想像上の西洋と一体化させ理想化して考える傾向を避けることができなかった。

加藤は懐疑主義者であったが、実際にはその懐疑主義に忠実でなかった。さらに史的唯物論も、一つの選択であり、全く同等の資格でもう一つの選択であり主観主義的立場に対立すると言う。つまるところ、加藤にとって道徳的信条は、そのどれもが、絶対的なものではなく、相対的なものであった。

生涯で最もイデオロギーの力を信じていたこの時期の加藤は、経験をあまり持たず、いくつかの「観念」を持って戦後社会へ出発しようとしていた。

年表

1945 年

8 月　信州上田で敗戦を迎える。

9 月　上田から帰京し、焼け野原の東京を目撃する。東京都目黒区宮前町に転居。

10 月 「原子爆弾影響日米合同調査団」の一員として約 2 ヶ月間広島市宇品に滞在し、治療と調査に従事する。戦後、このときに知り合ったメイスン博士を仲介にして、米国留学を図った（しかし、1949 年の母ヲリ子の逝去を契機に、沙汰止みになる）

1946 年

戦後の出発点となる「天皇制を論ず」(『大学新聞』)、「天皇制について」(『女性改造』)、「新しき星董派に就いて」(『世代』) を続けて発表。

5 月　中西綾子と見合い結婚。

（山辺春彦・鷲巣力『丸山眞男と加藤周一――知識人の自己形成』（筑摩選書、2023）、鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』（岩波書店、2018）参照）

年表を見ると、加藤は第一高等学校に在籍していた 1936 年以降、映画評や小説をはじめ、積極的に書いたものを継続して発表しているが、開戦の年 1941 年と敗戦を迎えた 1945 年は作品を一つも発表していない。

第一段落・第二段落

一九四五年九月、私は再び本郷の病院の二等病室に住んでいた。昼間は患者を診て、夜は研究室で顕微鏡を覗き、深夜に病院が寝静まってからは、内外の文芸家の著作を手当たり次第に読んでいた。病院での身分は、医学部の副手で、給料はなかった。週末が来ると、お茶の水から満員の電車を乗りついで、目黒区宮前町の自宅まで帰った。

宮前町の家では、父がその小さな借家の一部屋を診療室に改造して開業していたが、患者はほとんど来なかったし、母の健康は勝れなかった。しかし母が小人数の家事をみるのに差し支えるほどではなかった。いくさの前に嫁して、二児の母となっていた妹は、夫の両親の家に住み、出征した夫が中国から帰って来るのを待っていた。私の家族は、誰も、いくさのために死ななかったが、もともと多くもない家産を失い、戦後の物価騰貴に翻弄されて、生活は苦しかった。宮前町の家の前に流れていたどぶ川は、夏に水が減ると、蚊柱を生じ、雨が降りつづけば、溢れて床下に及んだ。たとえ川が溢れなくても、その川に沿った道は雨の日にぬかるみとなり、暗い夜は、何度か水たまりに踏みこまずに通ること

ができなかった。私はわが家の窮状を思う度に、この宮前町のどぶ川のほとりから脱出することができるとすれば、それは私自身の独力でするほかはなかろうと考えていた。

鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』[1]（以下、『いかにして』）による指摘

（１）敗戦直後の加藤家

1945 年 9 月、加藤が属した佐々内科は疎開先の信州上田から東京へ戻った。

戦時中に加藤の家族は世田谷区赤堤に借家住まいしたが、その大家からほどなく立ち退きを求められ、世田谷区松原に引っ越し、そこもまた立ち退きを求められる（本村久子氏談)。戦争は大家に資産の売却を余儀なくさせ、借家人に借家を得る二とも困難にさせた。加藤の家は戦争末期に信濃追分へ疎開したが、東京に戻ると目黒区宮前町（今日の目黒区八雲二丁目、八雲学園があるあたり）に居を定めた。祖母増田ツタと叔母増田道子夫妻が所有する一軒を借りて住んだのである。(282-283 頁)

（２）「戦後の物価騰貴」

「戦後の物価騰貴」はすさまじく、消費者物価指数は一九四六年から一九五〇年までのあいだにおよそ五倍に上昇した。物資不足のために統制経済が敷かれるが、統制を逸脱する「闇市」が至るところに誕生する。敗戦後の状況が「焼け跡闇市」と形容される所以である。(283 頁)

（３）父信一の経済状況

父信一は宮前町でまた医院を開業したが、かかりつけの患者は徐々に減り、新しい患者は来なかった。地盤を基本とする開業医が、開業地を次々に変えて流行るはずもない。当然、収入は少ない。母織子は専業主婦で収入はなく、加藤は無給の副手であり、妹久子はすでに嫁していた。加藤家の経済状態は必ずしも豊かだったとはいえない。(283 頁)

（４）「占領軍払下げの貨物自動車」

「占領軍払下げの貨物自動車」とは、敗戦により貨物自動車や乗合自動車が極端に少なくなったため、日本の復興策の一環として、占領軍は貨物自動車を日本に大量に譲渡した。これを受けて、日本政府は、払下げ貨物自動車を食料輸送、復興資材運搬、大都市通勤輸送などのために利用することを閣議決定した（「払下げ車輛処理要綱」一九四六年八月二一日)。(283 頁)

〈敗戦後の苦しい生活〉

「ぬかるみ」、「暗い夜は、何度か水たまりに踏みこまずに通ることができなかった」

⇨加藤家の窮状を家の前のどぶ川と重ね合わせて表現する。

加藤は寝る間を惜しんで文芸作品を読み、文学への情熱は一向に衰えていないことがうか

[1] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』2018、岩波書店。

がえる。一方で一家を経済的に支えていかなければならず、どぶ川のほとりから脱出するためには医師を続ける以外の選択肢はなかった。

第三段落

隣では、祖母と叔母とその娘つまり私の従妹とが、三人で一軒の平屋に住み、祖父の残した家財を少しずつ売って暮していた。いくさの間に亡くなった祖父は、その生涯にぜい沢の限りをつくし、先代からの財産を費い果していたが、それでもその道具類を古道具屋に売れば、女三人のつつましい生活をしばらく支えるに足りたのである。「おじいさまの身のまわりのものまで売らなくてもいいだろうにね」と私の母はいった。しかし叔母の長男、私の従兄は、東北大学の研究室にいて、そこからの仕送りはなかったし、隣の家では、祖母の年金の他に収入が全くなかつた。「没落の歴史も、来るところまで来たようですね」と私はいった。「おばあさんにその気があれば、まだいいけれど」と母はいった、「何しろ家のことは他人任せで、ぜい沢に育ってきた人だから……」。

〈東北大学の従兄〉

増田良道（1919-2011）。鷲巣力によると「良道は青山師範学校附属小学校から、旧制東京高校を経て東京帝国大学工学部に進学し、志村繁隆教授のもとで冶金学（やきんがく）を学ぶ。のちに東北大学教授となり、長く仙台で暮らす。フランス文学者鈴木信太郎の長女弌子と結婚した」という。（鷲巣『いかにして』32 頁）

〈「祖父の家」と日本の没落〉

『羊の歌』正編の第一章は「祖父の家」であったが、『続羊の歌』第一章の本章では「没落の歴史も、来るところまで来たようですね」という台詞が語られている。本章は日本国の敗戦という没落と、加藤家の没落から始まっていると言える。

「没落の歴史も、来るところまで来たようですね」

「おばあさんにその気があれば、まだいいけれど」

という母子の会話を、日本の敗戦に重ねて考えると、日本の没落も来るところまで来た（占領）が、国民はまだそのことをはっきりと意識していないというようにも読める。

第四段落

本郷と宮前町との間は、電車を乗りつげば、片道二時間ちかくもかかったが、占領軍払下げの貨物自動車を改造した市営の乗合では、一時間足らずであった。その座席は板張りで、坐り心地はよくなかつた。しかし焼け野原のなかの道を車は疾風のように走り、私はその速力と、その窓に近く展開する風俗を好んでいた。その頃の東京の風俗は、地位の上下と貧富の差を、事毎に強調するようなものではなかった。焼け跡の男たちは、カーキ色の国民服か肩章をもぎとった軍服を着ていたし、女たちは「もんぺ」をはいたり戦前の「洋服」を身にまとったりしていた。実力のある男たちは、闇市でもうけて、白米をた

べ、米国製の煙草を吸うことを、無上のぜい沢と心得ていた。彼らは乱暴で、他人の迷惑を顧みず、社会の全体についてどういう理想も、理解も、もちあわせていなかったろうが、活気にみちあふれ、自分自身の力だけに頼り、権威を背後にして傲慢で卑屈な人間よりは、はるかに正直であったのだろう。実力のある女たちは、占領軍の将校にわたりをつけ、「PX」の新しい衣類を着て、市営の乗合にも乗りこんで来たが、彼らの顔は、得意の絶頂でうれしさに輝いているようにみえた。焼け跡の東京には、見せかけの代りに、真実があり、とりつくろった体裁の代りに、生地のままの人間の欲望が――食欲も、物欲も、性欲も、むきだしで、無遠慮に、すさまじく渦を巻いていた。政府は、「一億総ざんげ」という言葉を思いついて宣伝していたが、誰もざんげしてはいなかつたし、またその必要を感じていたわけでもない。「ざんげ」どころではなく、当の政府が保証することのできない生活を――配給の食料だけでは栄養失調症を避けることができなかった――なんとかして維持するのに忙しかったのである。

〈PX〉

PX（post cxchange、アメリカ軍兵士用の商業施設）

〈焼け跡の人々〉

その頃の東京の風俗は、地位の上下と貧富の差を、事毎に強調するようなものではなかった。焼け跡の男たちは、カーキ色の国民服か肩章をもぎとった軍服を着ていたし、女たちは「もんぺ」をはいたり戦前の「洋服」を身にまとったりしていた。

⇨鷲巣『いかにして』による指摘

「国民服」とは、一九四〇年に制定された成人男性用常用衣服である。戦時下における「国民精神総動員」の一環として、「国民被服刷新委員会」を中心に国民服導入が図られた。〔…〕国民服が「カーキ色」なのは、日本帝国軍人の軍服がカーキ色を採用していたことによる。国民服も軍服と同じ色にすることで、軍国日本に対する帰属意識をつくり出そうとしたのである。成人女性用には「標準服」があったが、こちらはあまり普及しなかった。

軍国日本にあっては、軍人が崇められていた、あるいは崇めていると装う必要があった。そういう時代には、軍人たちにとって、軍人であることを誇る「肩章」は必要不可欠の小道具である。ところが、敗戦直後には早くる、旧軍人たちは「肩章」をつけることが「誇り」の表現にはなり得ず、むしろ「反感」を買うことを知っていた。さりとて他に衣類を購う余裕がないので、「肩章をもぎとっ」て、ということは「軍国日本」をかなぐり捨ててということだが、物資不足の折、否応なしに旧軍服を身につけたのである。

人びとの食糧事情は深刻で配給制が敷かれていたが、遅配や欠配はしばしば起こり、歯磨きの広告に「遅欠配は完全咀シャクで」（資生堂、一九四七）という涙ぐましいコピーさえ現われた。（284 頁）

⇨戦争によって既存の体制や価値観が崩れ、焼け跡には一時的な「平等」が現出していたといえる。一種の「実力」社会であり、男の実力とは闇市での手腕、女の実力とは占領軍将校との交渉がその代表的なものとして取り上げられる。

〈「焼跡の美学」〉

『1946 文学的考察』に収録された加藤周一「焼跡の美学」（1946 初出）は、東京を焼きつくした炎が「限りなく美しいものであった」という文章からはじまる。加藤は焼跡を眺め「東京の破壊が、正に破壊さるべきものの破壊であったという痛烈な見解を我々に強いる」と書く。

> 嘗て、東京の巷にさすらい、東京の建物とその中に営まれる生活をつくづくと眺め、其処に生れ、其処に育ち、其処を愛すること何人よりも強きが故に、其処を嫌悪すること何人よりも激しかった者だけが、その焼跡の美しさの真に悲劇的な意味を正しく感じ、理解することが出来るであろう。〔…〕そこからは何ものも出て来なかった。出て来たのは、あの滑稽で残忍な軍国主義にすぎない。破壊さるべきものは何も東京の建物ばかりではない。その中にあった生活、その中に育てられた思想、その中に営まれた――要するに一切である。悲惨な喜劇を産んだ、未だ醒めきらぬ悪夢を用意した、その一切を否定しないで我々は一体何をはじめることが出来ようか。
>
> 〔…〕「ほろびしものは美しきかな」と大正の歌人は歌い、『日和下駄』の作者はそのほろびしものを、嘗ての東京に置き忘れられた江戸文明の名残に愛惜してやまなかったのであるが、焼跡の美が我々を打つのは、想い出の甘美なるが故ではない。「ほろびしもの」は、日本の軍国主義と共に成長し、呪われた青春を荷う我々の世代にとって、寸毫も愛惜の対象であり得ない。（「焼跡の美学」『著作集』第 8 巻、45-46 頁）

⇨加藤にとって敗戦直後は、樋口陽一の指摘する「日本的なるものへの呪詛」[2]の時代。

〈一億総ざんげ〉

「一億総ざんげ」とは、「一億国民はこぞって天皇に対して敗戦したことを謝罪しよう」ということであり、敗戦直後の東久邇宮稔彦内閣がいいはじめたことである。ポツダム宣言を受諾した鈴木貫太郎内閣は総辞職し、替わって東久邇宮稔彦内閣が一九四五年八月一七日に成立し、降伏文書調印と敗戦処理にあたった。（鷲巣『いかにして』287 頁）

---

[2] 三浦信孝・鷲巣力編『加藤周一を 21 世紀に引き継ぐために――加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録』水声社、2020、29 頁。

第五段落

「戦後の虚脱状態」という文句も使われていた。しかし私が乗合の窓から眺めた東京の市民の表情は「虚脱状態」で途方に暮れているどころか、むしろ不屈の生活力に溢れていた。「虚脱」していたのは、戦争を讃美した言論界の指導者たちであったかもしれないが、闇屋でも、闇米でもうけていた農家の人々でもなかったろう。日本の人民がみずから発明し、好んで用いていたのは「ざんげ」でも、「虚脱」でもなくて、「スト」という言葉であった。この語には二義があり、それぞれ英語の《ストライク》と《ストリップ・ティーズ》に応じる。「ゼネスト」というときには前者で、労働者の総罷業を意味し、「ゼンスト」というときには後者で、素裸になることを意味した。「スト」の一語能く、戦う人民と享楽する人民、その組織と個人の全体を蔽って、戦後の一時期を象徴していたのである。

「戦後の虚脱状態」の否定

⇨「日本の人民がみずから発明し、好んで用いていたのは「ざんげ」でも、「虚脱」でもなくて、「スト」という言葉であった」

「スト」…Strike(ストライキ)と Striptease（ストリップ）

「戦う人民」と「享楽する人民」

「ゼネスト」と「全スト」

第六段落

私は焼け跡を疾駆する乗合自動車を好んだが、そこでは見られぬ光景を、電車のなかで見ることもあった。汚れた白衣を着た傷病兵が、どこかの駅から乗りこんで来て、車内をひと廻りすると、次の駅で、隣の車に移る。電車が次の駅に着くまでの短い間、乗客は見て見ぬふりをして、顔を窓外に向けたり、読みかけの新聞に没頭して気のつかぬ風をよそおったりしている.…傷病兵がさし出す箱に、小銭を入れる者は、ほとんど一人もいないという光景。それは車中の人々が、あたかも古傷を想い出させられることを厭ってでもいるかのようであった。あたかもあの真珠湾の日に歓呼して迎えたのが、「聖戦」ではなくて、何かのまちがいででもあったかのように。

「汚れた白衣を着た傷病兵」（傷痍軍人／白衣募金者）

⇨戦中は「白衣の勇士」と称えられたが、戦後の占領下、旧日本軍の戦傷病者に対する支援の多くは停止された。生活困窮に陥る元軍人も多く、社会問題になった。

独立回復後の 1952 年、日本傷痍軍人会が結成され、恩給や年金復活、拡充を求めて運動をした。日本人の傷病軍人・軍属や戦没者遺族らに対して日本政府は 1952 年から補償を

始め、翌 53 年には軍人恩給も復活したという。
上記の電車内での描写に見られるような「白衣を着た傷病兵」は「白衣募金者」とも呼ばれ、60 年代まで電車や縁日などにその姿があったらしい。しかし 64 年 10 月 22 日付の朝日新聞（夕刊）によると、傷痍軍人のふりをした偽物の存在や、オリンピックで海外からの観光客が増えると予想され、外聞が悪いために、「白衣募金」を排斥する運動が起こった。

〈鷲巣『いかにして』による指摘〉
白衣の傷病兵が電車内や街頭で募金活動をするのは、一九四〇年代後半から一九五〇年代にかけては普通に見られた光景である。私の幼い記憶では、誰も金を箱に入れないわけではなかったが、ほとんどの人は入れていなかった。ここには「変わり身の早い」日本人の姿が活写されている。敗戦直後に多くの日本人は「聖戦」遂行が「何かのまちがい」であったかのように感じていた。今日では「平和」願望が何かの間違いであったかのように考える日本人が少なくなくなってきたが……。(288 頁)

「見て見ぬふり」「気のつかぬ風をよそおったり」
「それは車中の人々が、あたかも古傷を想い出させられることを厭ってでもいるかのようであった。あたかもあの真珠湾の日に歓呼して迎えたのが、「聖戦」ではなくて、何かのまちがいででもあったかのように」
⇨車中の出来事を象徴的に描写することで、当時の日本の状況を表現する。敗戦後、日本にとって戦争はもはや「聖戦」ではあり得ず、「古傷」「何かのまちがい」という目を逸らしたいものであった。「何かのまちがい」という言葉には、まちがいが起こる因果関係がまったく含まれておらず、偶発的な「まちがい」という印象をもたらす。
　さればこそ鷲巣が「今日では「平和」願望が何かの間違いであったかのように考える日本人が少なくなくなってきたが…」と書くような状況が生まれるのであろう。

第七段落
　電車のなかには、また、人の好さそうな沢山の顔があり、週末には、子供連れの父親や、夫婦もいた。彼らはそれぞれの家庭で、よい父やよい夫であったにちがいない。そのことと、その同じ人間が、昨日までは中国の大陸で人を殺していたであろうことが、どうして折合うのか。日本人の人柄が変ったのか、それとも変ったのは、さしあたりの状況にすぎず、同じような条件が与えられれば、また同じような行為がくり返されるだろうということか。子供に何かせがまれ、しきりになだめすかそうとしている子煩悩の中年の男の顔は、昨日悪魔であったかもしれないその男が、今日は善良な人間であり、明日また悪魔にもなり得るだろうという考えと共に、私には不可解な怪物のようにもみえてきた。性は善なりや。これは信ずるに足りない。性は悪なりや。しかしこれもまた信じることができ

ない。そもそも一人の男について、その性の善悪を問うよりは、多くの人間を悪魔にもし、善良にもする社会の全体、その歴史と構造について考えた方がよかろうという考えに、私はそのとき到達したように思う。それはその場の思いつきというのではなかった。そのときの考えは、その後の私のものの考え方の方向を決定した――どんな人間でも悪魔ではないのだから、私は死刑に反対し、戦争はどんな人間でも悪魔にするのだから、私は戦争に反対する。

〈初出との異同〉

「私は戦争に反対する」⇨私は戦争に反対することをやめないだろう。（初出）

〈人間の性の善悪を問うより、社会の全体、その歴史と構造について考える〉

「変ったのは、さしあたりの状況にすぎず、同じような条件が与えられれば、また同じような行為がくり返されるだろうということか」

⇨日本人が根本的に大きく変わったというわけではなかった

「子煩悩の中年の男の顔は、昨日悪魔であったかもしれないその男が、今日は善良な人間であり、明日また悪魔にもなり得るだろう」「不可解な怪物のようにもみえてきた」

⇨過去・現在・未来、人間は変わりうる。加藤は、今日は善良な人間である男が明日また悪魔になる可能性を示唆する。一人一人の人間の性の善悪を問うより、「人間を悪魔にもし、善良にもする社会の全体、その歴史と構造について考えた方がよかろう」と加藤は考える。

⇨その後の加藤のものの考え方の方向を決定した。Ex.)死刑に反対し、戦争に反対する。

第八段落

電車のなかで席に坐っている男たちは、たいてい居ねむりをして大きく股を開いていた。席に坐るためには、腕力で他人を押し除ける必要があったから、坐っていたのは中年以下の男たちばかりで、女や老人ではない。あるときそういう光景をみた占領軍の若い兵士が、坐っていた男たちの一人を、手まねで起たせ、その代りに女を坐らせようとしたことがある。男は不承不承に起ちあがったが、空いた席には誰も坐ろうとしない。坐れという意味を、兵士は手まねで説明し、女が解るまでには暇がかかり、解った後でも、兵士と起ちあがった男の顔を見くらべていて、容易に動きそうもない。しかし男を起たせ女を坐らせるという事業をはじめた以上、兵士の側でもその事業を途中で放棄するわけにゆかなかった。漠然と周囲に向って「すみませんねえ」と咳きながら、困惑した表情の女が坐ると、兵士ははじめて満足し、次の駅で降りていった。周囲の男たちは――私も何度かそのうちの一人であったが――「余計な世話をやく野郎だ」という思いと、「そう言えないのは敗戦だからしかたがない」という思いとの間で、今見たばかりの光景をそれぞれ思い返

し、女は、ばつが悪そうに、「占領軍兵士のおせっかいの片棒をかついだのは私ではない」といいたそうな顔をしているが、一度坐った席を捨てて起ちあがるというのでもない。……という具合で、米軍の日本占領は、はじまっていた。いや、それは「占領」とはよばれず、日本側では「駐留」とよばれていた。「降伏」が「終戦」とよばれていたように。そのとき占領軍は日本人を理解していなかったのだろうが、その無理解は、席を起てといわれれば、何もいわずに起ちあがる日本人によって、恒久化されたように思われる。

〈加藤が占領軍の若い兵士の話を書いた意図はなにか〉

鷲巣力『いかにして』による指摘

加藤が観察した敗戦直後の光景の三つ目は、占領軍と日本人とのあいだの関係である。占領軍と被占領地の人びととの関係は、多くの場合、異文化接触であり、支配被支配の関係である。占領軍のもつ文化を被占領地の人びとに強制するという現象が不可避的に起きる。ここに描かれるのは、自分が正しいと信じることを他人もすべきだと考える文化と、自分が正しいとは信じないことでも強い者がいえばそれに従う文化との接触という一面をもつ。

占領軍兵士にすれば、席を立った男は納得したから立ったのだと信じたろう。一方、この光景を目撃した日本人の多くは、男は納得したから立ったのではなく、若いとはいえ占領軍の兵士だからこそ、その若者の指示に従ったのだ、と考えていた。こういう齟齬あるいは無理解は、政治の世界で経済の世界でも起こっていたに違いなく、その後もずっとふたつの文化はぶつかりあっていた。だからこそ国家主義的な考え方をする人たちは、はっきり「「NO」と言える日本」にしたいと考えるのである。

加藤はたまたま目にした光景を語ったのではない。実際に経験し、かつ衝撃を受けた事実を綴ったのである。これらの光景から「日本人のものの考え方とは、いかなるものなのか」という疑問を抱いて、日本人のものの考え方の基本を、歴史をさかのぼって明らかにしたいと考えるようになる。戦時中の知識人の思考と行動、そして戦後の人びとの態度や行動を観察したことを契機にして、『日本文学史序説』や『日本その心とかたち』を構想したのだ、と私は考える。(290-291 頁)

〈言葉の言い換え〉

「占領」と言わずに「駐留」

「降伏」と言わずに「終戦」

〈押しつけ民主主義の寓話〉

「席に坐るためには、腕力で他人を押し除ける必要があった」

⇨「腕力」による秩序が形成されており、女性や子供、老人は席に座ることができず、腕力の弱い者（弱者）は黙って見ているしかない。その弱者を救済しようとしたのが若い米

兵である。彼は占領軍の一員なので、「腕力」による秩序の外側に存在するといえる。あるいは腕力（武力）によって日本を降伏させたので、その秩序の頂点にいるとも読める（「そう言えないのは敗戦だからしかたがない」）。彼は女性を座らせようとする、その理由は「レディ・ファースト」によるものかどうか不明。米兵の行為は「余計なお世話」「おせっかい」と受け止められる。席を譲られた女性もその感想をもっていたようだ。

「そのとき占領軍は日本人を理解していなかったのだろうが、その無理解は、席を起てといわれれば、何もいわずに起ちあがる日本人によって、恒久化されたように思われる」
占領軍→納得して席を起ったと思っているのではないか。一般に、身体的には男性より頑丈でないとされる女性に席を譲る美徳が米兵には備わっているが、日本男性にはその感覚はなかっただろう。
鬼畜米英から民主主義への転換も、同様に「席を起てといわれれば、何もいわずに起ちあが」った結果ではなかったか。
民主主義が何か理解せずに受け入れたという寓話としても読める。

第九段落・第十段落

占領がはじまったときに、私は予想したことが起りつつあると考えていた。私は敗戦の具体的な形を予想してはいなかったが、敗戦そのものは予想していた。そう予想した理由は、消極的には、世上わが国の強味や米国の弱味として指摘されていたことが、根も葉もない空想にすぎないと思われたからである。しかし積極的には、そもそも戦争を、民主主義対ファッシズムの戦いと考えていたからでもある。世界の歴史は、祭政一致から祭政分離と信教の自由へ、不合理な精神主義から合理主義へ、非能率的な集団から能率的な組織へ、封建的農業社会から産業資本主義社会へ、権威への服従から自主独立の個人主義へ、家柄や男女の差別の強調から人間の人間としての平等の強調へ、次第にしかし確実に進んで来たと私は考え、日本のファッシズムが、日本社会の「後れ」の絶望的な自己肯定の試みにすぎないと判断していた。社会の「後れ」を基礎とするファッシズムと、「進み」を基礎とする民主主義との、世界的な規模での対決には、「歴史」がその決着を予言するだろう。歴史の歯車は逆には廻らない‥‥それが私の信条であり、その信条から出発した予想は、的中し、私の信条への確信は強められた、ということになるだろう。

予想の的中は、一般に、必ずしもその予想の前提を正当化しないことは、いうまでもない。しかし問題は、知識の確実さではなく、一種の道義感であった。天網恢恢疎にして漏らさず。

「私は予想したことが起りつつあると考えていた」
「私は敗戦の具体的な形を予想してはいなかったが、敗戦そのものは予想していた」
「世界の歴史は、〔…〕次第にしかし確実に進んで来たと私は考え、日本のファッシズム

が、日本社会の「後れ」の絶望的な自己肯定の試みにすぎないと判断していた」

〈当時の加藤の戦争に対する理解と信条〉

社会の「後れ」　V.S.　社会の「進み」

　ファッシズム　V.S.　民主主義

⇩

「社会の「後れ」を基礎とするファッシズムと、「進み」を基礎とする民主主義との、世界的な規模での対決には、「歴史」がその決着を予言するだろう」

⇩

「歴史の歯車は逆には廻らない…それが私の信条であり、その信条から出発した予想は、的中し、私の信条への確信は強められた、ということになるだろう。」

〈加藤の文章表現〉

・「考えていた」「予想していた」「私は考え」「判断していた」

⇨当時の加藤の主観的な考え、予想、判断であり、実際にそうであったか、また、その考えや判断を執筆当時も持ち続けているかには触れない。

・「予言するだろう」「ということになるだろう」

⇨断定を避ける。

・当時の加藤の世界観に従えば、歴史が進めば進むほど民主化は進むということになるが、果たしてそうだろうか。

加藤は敗戦直後に抱いたこのものの見方を修正することはなかったのだろうか。

加藤にとって「信条」とは何かを次回議論したい。

以上